

[研究ノート]

国家と倫理

—福沢諭吉と中江兆民の国際倫理観の比較研究—

龔 穎

昨冬から蔓延してきた新型コロナウイルスが国際倫理観を含めた様々な反省や思考を起こしている。本稿は一度明治に戻って、先賢たちの知恵を借りるつもりで「国家と倫理」のことを考えてみたいと思う。

はじめに

1868年の明治維新以後、日本は近代社会に突入し、近代国家の構築に力を注ぎ始めた。それ以来、「国家」と「倫理」との関係という問題は、しばしば議論を巻き起こし、様々な発言や思索が絶え間なく出現していた。それらの議論の注目点から見れば、大まかに二つに分けられる。一つは、国際関係レベルで「国家」を捉え、これを出発点として国家と倫理との関係を議論する視点、もう一つは、国家内部での国家権力と国民との関係に焦点を集中させ、色々と検討する視点である。

日本の近代初期における最も代表的な二大思想家—福沢諭吉と中江兆民は、「国家と倫理」に関わるいくつかの問題について深く考え、さらに時事評論や専門著作などの形を通じて自分の見解を表した。本稿は、福沢、兆民両者の主な主張を考察し、比較を通して両者の思想の同異、変遷及びそれらの相違や変化をもたらした原因を探ってみよう。